

## 浮島雅楽保存会のこと

お話 / 最上俊一郎 氏 (浮嶋稲荷神社宮司)

### ■発足のきっかけ

平成 11 年に開催されたエコミュージアムの催し「よみがえれ大沼浮島の響き」がきっかけで翌 12 年に発足した。ちょうど 10 年前になる。

その催しでは、一部では「大沼浮島の未来を考えるシンポジウム」、二部では役の小角を起源とし大沼から伝わったとされる宮城県仙南地方の「山伏神楽」の 600 年ぶりの里帰り公演、そして「雅楽演奏」や「浮島太鼓」などの演奏会も行った。



浮嶋稲荷神社例大祭で行われる行列

雅楽演奏は、山形市の六榎八幡宮雅楽会にお願いして神社に眠っていた雅楽器で演奏していただいた。神秘的な大沼の自然の中に、神秘的な雅楽の音色が調和して響きわたり、私も村のみんなも感激した。

そして「雅楽を復活させよう」「雅楽とともに浮島を守ろう」と盛り上がった。「浮島雅楽保存会」という名前には、その二つを守る意味が込められている。誰でも参加できるように公民館事業として練習は始まった。

### ■眠っていた楽器

大沼の雅楽は、50 年程前の私が子どもの頃に、やはり「復活させよう」と村人達が習っていたことがあった。楽器は、先祖が昔寄贈したものがあつた。宮城県の塩竈神社に務めていて雅楽の指導者だった大滝速見さん(西川町)が、10 日程泊まりがけで教えてくれていた。しかし、雅楽への熱は続かず楽器もそのまま眠ってしまっていた。

### ■練習・演奏活動

私たちの練習は、月に二度ほど集まってやり始めた。ところが、ピアノみたいに叩けば決まった音が出るものではなく、勘をたよりに鳴らさなければならぬから、きちんとした音が出ない。肺活量もいる。特に「箆策(ひちりき)」は大変だった。多くの人が吹いてみたが、みんな「とてもだめだ」とやめていった。そして残ったのが現在のメンバーということになる。



箆策(ひちりき)

その後、足りない楽器や装束を、町の「志藤六郎村おこし基金」を利用して購入した。演奏の時に私たちを囲むようにして置く赤い欄干は、宮内庁の楽隊もやっている雅楽の舞台。みんなで木を加工して色を塗って手作りしたものだ。

現在は、浮嶋稲荷神社の大祭や元旦零時からの元朝参り、春の空気まつりなどで演奏をしている。また、学校授業でも取り入れるようになり、地元の大谷小学校などに何度か演奏指導に行ったこともある。

### ■これから

心配なことは、やはり後継者。現メンバーはみんな 50 ~ 60 代。いずれ 70 代になってしまう。でも近頃、吹奏楽をやっていたという 20 代の女性が入ってくれたのは嬉しかった。せっかく復活した大沼の雅楽だから、若い人達にどんどん入ってもらって、途絶えさせないように伝えていきたいと思っている。

(取材 / 平成 22 年 10 月 安藤竜二)



浮島雅楽保存会の演奏は、毎年 5 月 5 日に行われる浮嶋稲荷神社例大祭と、6 月に開催される空気まつりで見るができます。

### 最上 俊一郎 (もがみ しゅんいちろう) 氏

昭和 23 年 (1948) 生まれ。浮嶋稲荷神社宮司、山主別当・大行院第 52 代当主。現大沼区長。浮島雅楽保存会代表。